

## 雜 錄

## トーマス・アケキナス

## エティエヌ・ジルソン

八世紀の初歐洲文明は存亡の危機にあつた。七三二年フランク王の宮宰シャルル・マルテルはツールの戦にサラセン人を撃攘したがこの一戦は、或る史家のいふやうに、基督教文明と回教文明との何れが將來歐洲を支配するかの別れ目であつた。この戦に敗れたサラセン人は西班牙に退き、戰塵は一先づ收まつたが、今度は他の戰亂が精神の世界に起つた。亞拉比亞の諸侯は藝術家、詩人、哲學者、神學者を連れ來つて、圖書館を建て學校を開き、諸科學を、特に當時の歐洲學者を斷然仰へた形而上學を教へたのである。西班牙に於ける決定的敗北の後にも、彼等の最大の哲學者、征服者をも征服し得る程に有力なアエロエスが生れてゐる。アキケンナの諸著が十二世紀に、アエロエスのそれが十三世紀に、羅匈語に移されて、亞拉比亞の脅威が再び迫つた。この侵掠を阻止する第二のシャルル・マルテルは誰であつたか。佛では、オーゼルニユのギョーム、英ではロバト・グロステート、ヘイルズのアレグザンダー、ロジャ・ベイコン、マシーユのアダム、獨ではアルベルトゥス・マガヌス、伊ではボナエントゥラ、アクワスパルタのマッタエウス等は起つて勇敢に戦ひ、何れも勝利への道を拓いたが、しかしその榮譽はたゞト

マス・アケキナスのみが得たのである。勿論シャルル・マルテルと西班牙諸王の勝利があつてこそ、トーマスは自ら千戈を執る機會を得たのであるが、しかしこれらの勇敢な戰士達の偉業も、トーマスが戦つて得た勝利なしには、無に歸したであらう。彼の主著の總てに於て、又ナポリや巴里の講壇で全歐から集つた學生を前に、トーマスは歐洲文明を回教の脅威から救はうとする困難な仕事に當つた。彼は終に力盡きたとき、筆を措いて未完の「神學大全」を藁に比したといはれるが、その藁をば歐洲文明は床にせんとしつゝあつたのである。

では、亞拉比亞哲學とは如何なるものであつたか。それは本質的には希臘の新プラトン哲學と回教的宗教感情との混合であり、それらの教説は結論から見ても方法から見ても多くの點に於て分裂を示してゐる。例之、プロティノスの教説は、所謂「アリストテレスの神學」なる書を通じて、この運動の根源となつたが、アルキンディやアルファラビの説と同一ではない。又アルガーゼルは屢々アキケンナと見解を異にし、アエロエスは大體兩者と一致しない。しかしこれらの對立の背後には、或る本質的原理に關する一致、意圖の類似、精神的親和が存してゐた。彼等の教説によれば、プロティノスに於てのやうに、第一原理は永遠、必然、自己思惟的實體であり、その觀想が同時に淨福である。第一存在は、定義によつて、一者であるが、諸結果に對する原理として、それ自らの中に、睿智的なるもの總てを可能的に含む。このやうな思想は、既にアリストテレスの神觀の中

に見られる。神は、永遠に自己観想の生を送り、他方神によつて創造されず、否その存在をさへ知られない世界は、絶えずその原因の完成を模倣せんとし、永遠に諸天球は運行する。アリストテレスからプロティノスや彼の亞拉比亞の後繼者達に到れば、神的観想の完全な統一の中に含蓄された可能的多様性は、かの非分化の状態には止らずして、いはゞ神の外に自己を實現する。神は思惟し、世界は存在する。しかし、神は、彼自らの完全性から流出する諸物の轉變に係らない。萬物の父でありながら、子をもつことをさへ知らない。父といふよりも、絶えず注ぎ出しながら、流を生じること知らない、その存在と方向とに無關心な水源に比すべきであらう。加之、このやうな世界には偶然はない。否歴史もない。神的意志の意識的決斷によつて、時間に於て創造されたのではなく、永遠に必然にその原因から流出する。諸物の存在のみならず、その本質も、その總起の順序も必然的である。そこには、或る歴史の連續的展開が考へられる餘地はない。世界は永遠に、必然的演繹の形態に於て、神に於て永遠、單一なる思想を表現する。この必然性が支配する世界に於て、人間は如何なる特殊の地位を與へられるか。人間は身體と靈魂である。そして人間の靈魂は、動物や植物の靈魂でさへなし得る、身體に生命を與へる力のみならず、離存睿智に似た、睿智的認識を得る不思議な力を有する。それ故、人間性は複合的なもの、そして睿智の世界と質料的諸實體の世界との境界に存する。しかし、質料は個別化の原理であるから、我

々の睿智的認識は個體としての我々に屬するものではない。それは我々の中に存するけれども、個體として我々から由來するものではない。この故にアキケンナは、或る離存睿智が總ての人間に共通な能動的知性であると考へた。我々は、個體としては、可能的知性を有するに過ぎない、それは上から照明されて、普遍的能動知性からレディ・メイドの眞理を受けるのである。アエロエスは、正當にも、更に一步を進めて、睿智的認識が個體としての人間によつて生産されないとすれば、何故個體はそれを受け得るかは不可解であると考へて可能的知性の統一を説いた。個體としては、人間は皆果敢ないもの、暫しの間、それが屬する種を表現するに過ぎない。個體は認識しない、否思惟することさへない。寧ろ、或る離存睿智の思惟の場所となるのみ、永遠の眞理の瞥見を、或はその閃光を有するのみである。このやうな世界は基督教的信仰にとつて恥辱であり、背理である。既にアウグスティヌスが明かにしたやうに、神は言を生む限り、世界を生んだのではなく、世界を創造したのである。世界を創造した後、彼の自由な決意によつてその存在を維持するからには、神は世界の存在を無視することなく、攝理によつて定められた目的に導く。「五羽の雀は武錢にて賣られ、その一羽だに神の前に忘れられることなき」世界に於て、個體は無價値なものと考へられようか。「我々の頭の髪までも皆數へられ、我々は多くの雀よりも優れるものである」。我々は皆神によつて永遠に豫見されてゐるのみか、彼の意志によつて無限の可能存

在中から選び出された。個體として創造され、保護され、贖はれたのである。「我が血の一滴を與へん」と基督から約束された各個體はどうして無價値であり得ようか。それ故これらの亞拉比亞哲學に對する基督教的反擊の激烈さも想到される。基督教が、そしてそれと共に基督教文明が危殆に瀕したのである。しかしアキケンナやアエロエスの主張の宗教的誤謬を示すことは容易であつたとしても、反對説の哲學的眞理を證明することは遙かに困難であつた。オーエルニユのギョーム、ヘイルズのアレグザンダ、ロジャ・ベイコン、アルベルトゥス・マグヌス、ポナエントウラ、彼等は皆人間が不滅の靈魂とそれ自らの知性を有する獨立自存する完全な實體であることを明かにしようと欲したが、彼等は如何にしてそれを證明し得たか、アキケンナとアエロエスの背後にはプロティノスがゐた。そしてこのプロティノスこそ、彼等が救ひを求めた總ての基督教思想家の後立をなすものであつた。アウグスティヌスもディオニシウスもその哲學の諸要素をプロティノスに仰ぎ、エリウゲナに至つては前二者を通じて二重に彼に負うてゐる。それ故、亞拉比亞思想家に抗して起つた基督教思想家達は、彼等の共通の敵から、その敵に向ける武器を借らうとしたのである。彼等の論據は甚だ薄弱であつた。戰は窮極に於てプロティノス對プロティノスであつた。プロティノスの勝利は必至であつた。少くとも、トーマスがかゝる態度の缺陷を認めて、それを改めるまでは、プロティノスの勝利は動かなかつた。

トーマスの一撃は困難の根基を衝いた。彼の周圍の基督教思想家達は、世界が神によつて創造されたことを認めながら、それを希臘的な神によつて生み出されたかのやうに述べてゐる。基督教的な神、彼の創造、諸物の被造とは何であるか、それを明かにしなければならぬ。プロティノスは彼の考へた神を「あるべきであつたところのものであるもの」と呼んでゐるが、このやうな神は、その完全性そのものによつて全く決定され、現にあるやうにしかあり得ず、實際になしたやうにしかなし得なかつたであらう。反之、トーマスの考へた基督教的な神は、所謂「ありてあるもの」、絶對的無限性に於ける存在である。そして存在そのものであるが故に、存在を他者に與へる、即ち創造することが出来る。しかし、創造された世界は生み出された世意的行爲である。従つて、創造された世界は生み出された世界と異り、必然的諸物の秩序ではなくして、活動的なる、或は自由なる諸原因の秩序をなし、その各は創造者の無限の寛仁を證しなければならぬ。そしてこのやうな世界こそまさしくトーマスの世界である。それは被造諸原因の世界である。そして諸原因は創造されたが故に、創造し得ないが、原因であるからには自らの活動能力を賦與されてゐなければならぬ。この結論はそれ自體重要であるのみならず、トミスムの眞の意味が完全に現れる中心點に我々を導く。或る批評家はこの結論を、トーマスは神學者であるから、哲學と神學とを、自然と恩寵とを混合せざるを得なかつたといつて、斥けた。ところがこの非難

こそまさしく、彼が同時代人に警告したことを、即ち「自然なければ恩寵なし」といふ事實を、忘却したと誣ひるのである。又他の批評家達、例之ルターのやうなプロテスタント、マールブランシュのやうなカトリクは、トーマスは自然に盲目的に従つて、基督教神學の根本原理を忘れたと非難する。それ故、第一の批評家達は、トーマスが常にアウグスティヌス派に對して實際上になしたことをなさなかつたと非難し、第二の批評家達は、同様にトーマスが常にアエロエス派に對しなしたことをなさなかつたと非難するわけである。恐らく、この兩種の非難は、彼が双方に於ける眞なるものを認めようとしたことによるのであらう。そしてそれは、双方に於ける誤謬の承認を拒否することなしには不可能であつたらう。それ故、トーマスは孤獨の道を歩まねばならなかつた。そして現代に於ても、彼の神學を疑ふ實證主義者と、彼の哲學への依存を好まない敬虔主義者との嫌惡の的として、孤獨の道を行んでゐるのである。これら二様の相對立せる反動はトミスムの本性に不可避なものであらう。トーマスによれば自然的秩序の存在と自律を主張することは全く正しい、創造があつたからには自然は存在しなければならぬ。しかし神の意志がなければ自然は存在しないだらう。實際、自然はその存在と活動を神に負うてゐるのである。他方、自然を犠牲にして神の榮光を昂めようとすることも同様に誤つてゐる、それは結局神自らの榮光を以て償はねばならぬから、神が獨りで、所謂自然的諸結果の總てを生ずることを欲したなら、

諸原因と見えながら實はさうでない諸物の宇宙を、何等の結果をも生じない無益な諸原因を創造したであらうか。そのやうな世界は、神の威嚴を増すどころか、神の智慧を傷けるものであらう。

自然的秩序を輕視しようとするアウグスティヌス派は、被造物の弱小によつて創造主の偉大を證明せんとする悪しき護教家達である。ところが、神の偉大を證明せんと欲するなら、我々はそれを被造物の構造の中にこそ求めるべきである。善なる原因の結果は常に善である。最も完全な原因の結果は必然的に完全であつて、その原因の完全性を表現しなければならない。神の世界創造は無限の寛仁の業である。神は被造物に、それを受け得る限り、自らの完全性を賦與した。このやうな原因の像に従つて造られたのであるから、世界は少くともその創造主の無限の寛仁の痕跡を示すべきである。そしてそれは世界が因果性によつてなすところのものに他ならない。神はその善性を被造物に、その各が自ら受けたものを他に傳へ得るやうに、與へ給うた。それ故、諸物からその作らきを奪ふものは神の善性を傷ける」とトーマスはいつてゐる。それ故、トーマスの哲學的並に神學的事業の全體を支配する中心的直観は、自然を認めることなしには神を認めることは不可能であること、そして自然を認めることこそ神を認める最も確實な道であるといふことに存する。彼は、現實的に能作的なる原因の秩序がなければ、科學は存在しないといつて、科學のために最も鞏固な基礎を置か

うとしてゐるが、この直観は同時に又、神學のために最も確實な基礎を與へるものである。人がその所業によつて知られるやうに、神も同様である。彼の創造物は彼の自然的啓示である。我々は諸物を知らないなら、神を知り得ないであらう。又神を知らないなら諸物の本性について誤るであらう。アエロエスはもつと神學に通じてゐたなら、一層優れた哲學者であつたらう。我々はアウグステイヌスの偉大に尊敬を吝むものではないが、若し彼が一層優れた哲學者であつたなら、もつと偉大な神學者であつたらう。理性と最も嚴しい宗教的感情の諸要求の完全な調和こそトーマスの祕密である。蓋し眞理は全體であり、我々はその全體を有つか、或は失ふかであるから。

我々はこの點から、神の榮光を昂めることに決して倦まない、神學者が同時に又、人間性の威嚴の本性を發見した最初の哲學者である理由を理解することが出来る。彼は先づ、神が人間を理性的の存在者として創造したことを認めながら、しかも人間に認識能力を與へないことの不合理的を示さうとした。それは、アキケンナ派とアエロエス派に對しては、各人に於ける個體的知性の承認を意味すると共に、アウグステイヌス派に對しては、人間に彼自らの知性を許し、彼自らの眞理の責任ある製作者であることを認める大膽な試みであつた。しかし第二の主張はまさしく當時のアウグステイヌス派の學者達の拒むところであつた。ボナエントウラによれば、神は我々の眞の認識の直接の原因、我々の中に住み教へる師、人間知性を照明する太陽であつた。ロ

ジャ・ベイコンによれば總ての認識は、神學のみならず科學も哲學も神の啓示であり、トーマスの直接の師なるアルベルトゥスでさへ、總ての眞の認識は、自然的秩序に關係するものも、聖靈による神の特殊の恩寵であると確信してゐた。これらの教説は、總てを神に歸屬せしめる最も深い基督教的感情と不可分なやうに見えたから、それを吟味することは困難な仕事であつた。しかし、トーマスが與へんとした解答はそれに劣らず基督教教的であり、又遙かに哲學的に眞なるものであつた。被造世界に於て、總ての原因は自己の諸結果を生じ、かくして自らを受けた完全性を他に傳へるといふ原理は、先づこの地上に於ける最も高貴な被造原因、人間知性にあてはまらなければならぬ。我々は神からレディ・メイドの眞理をうけとるのではなくして、我々が眞理を、その諸要素を諸物から集めて、作るのである。「我々に於ける諸物の認識は、プラトン派の人達が考へるやうに、或る獨存する、現實的に睿智的な諸形相の分有或は流入によつて生じるのではなくして、知性が諸形相を、感覺の媒介によつて獲得するのである。」成程、我々が諸物から我々の諸概念を抽出し、それを必然的判斷にする光は神から由來する、トーマスはアウグステイヌスと共に、ヨハネの「言は世に來る總ての人を照す眞の光なり」を繰返してゐる。しかし、それは神が我々の各の中に自然の光、即ち我々に於ては神の光の分有であり、類似である理性そのものを創造したことを意味する。我々は神によつて認識能力を有するものとして創造された。ト

トマスは我々が知性とその自然の光をもつて存在することを主張する。そしてこの意味に於ては、我々は知性の作らきの悉くを神に負つてゐる、といふことは正しいが、しかしその自然の光は、我々に贈られたもの、眞に我々のものなのである。

さて、トマスはアウグスティヌス派に對して勝利を収めたが、他の方面で失ふことはなかつたか。アリストテレスとアエロエスに従へば、人間は身體によつて個體化される、それ故に各個體はそれ自らの知性を有することを拒まれる。定義によつて非質料である知性は同時に個體的であることは出来ない。従つて個體の價値は認められない。アエロエス説は誤つてゐる、しかし兎も角整合的である。これに對してトマスは、原理を維持しながらその結論を認めない。即ち、質料は個體化の原理である、しかも各知性は個體的である、否個體はそれが屬する種のとほ全く異つた、それ自らの價値を有する永久不滅の存在である。これらの主張は一見矛盾を含むやうではあるが、トマスによれば、それらは決して矛盾を含むものではない。先づ、人間は身體によつて個體化されるが、しかし人間の身體は靈魂がそれに生命を與へる限り、人間の身體といふ名に値する、即ち靈魂がそれに存在を與へるが故にのみ、身體である。靈魂が身體によつて個體化されるといふよりも、我々の知性は、具體的個體として自己を實現するために要する、個體的な身體を形成するといはなければならない。人間は身體プラス靈魂ではなくして、兩者の結合である。そして此の生に於ては身體なしに靈

魂を有することが出来ないやうに、知性なしに身體を有することも出来ない。このやうな密實な全體を形成する諸部分の一人は他なしに考へられないが、その全體に現實的存在を與へるのは知性であつて、身體ではない。加之、人間は身體によつて個體であるのみならず、又人格である。人間身體の形相が知性であるが故に、人間に於ける身心の關係は他の生活體に於けると異つてゐる。動物は(或は樹木さへも)その體によつて個體であり或る動物體の質料が他の動物體の質料と同時に數からいつて一であることは不可能である。しかし動物の場合には、身體を形成する力はその形成に於て盡きる。人間の場合には、生活原理は有機的原理である前に知性である。知性はそれ自らに身體を、知性的活動のために要するが故に形成するのである。感覺なしには概念はない、身體なしには感覺はない。人間知性が身體を有し、靈魂であるのはまさしくこの故である。人間には、彼の靈魂の生活力以上の或るもの、認識と自己限定との原動力なる知性がある。我々は各、他から數的に異なるのみならず、獨自の、何物を以ても代へ難い或るものである。「人格」(ペルソナ)といふ語は「即目的」(ベル・セ・ウナー)から由來すると考へることは誤つてゐるが、正しい語源解釋よりも遙かに意味深長である。人格は單に個體ではなくして、同種に屬する他の如何なるものともその性質を共有しない單一者である。この故に「人格とは最も完全な存在である。」

こゝに於ても亦、トマスの哲學的諸發見と基督教的感情と

の驚くべき統一が見られる。彼による近代人格主義の建設は人間の権利の完全な宣言と、基督教的神の無限の寛仁の完全な承認である。「われらに象りて、われらのごとくにわれら人を造らん」といふ神の言は、人間がそれに優るものなき威嚴を以て創造されたことを意味する。人間のみが知性を賦與され、そして知性は自由意志の根基に他ならない。認識と自由を有する存在として、人間は神から世界の主宰を委ねられた。神以下に副創造者は存在しないが、副攝理の存在の餘地はある。そして人間こそ代理の地位を占めるものである。自らの認識と自由意志によつて自らの運命の責任者であるが故に、自らに對して攝理であるのみならず、神によつて「全世界の統治を委ねられた」が故に、世界に對しても攝理である。人間はそれを許されたに止らず、特に選ばれて命じられたのである。「人の子はいかなるものか」といふ問ひに對して、トーマスはパウロと共に「神と共にはたらくものなり」と、又ディオニュシウスと共に「神と共にはたらくものとなることこそ最も神的なり」と答へる。これ程、回教的世界の宿命論を、又希臘的世界の必然論を超越したものはない。そしてこのトーマスの世界こそ、眞に基督教的な世界、従つて我々が今日その中に生きつゝある世界である。現代の哲學者や社會學者の異論に拘らず、人間は如何なるものになるかを決定し得る自由な人格である。藝術家が絶えず作品の完成に専念しながら、常にその仕上げに至らないやうに、又その作品に出来不出来があるやうに、我々は絶えず自己形成に努力し、

或は善く或は悪しく自己を形成する。その成果は審判までは確知されず、その際でさへ我々の作の價値の決定は、我々ではなくして、神のみがなすところである。しかしこれだけは我々によつても確知される——審判の際我々の生は、善かれ悪しかれ、我々自らが作つたところのものとして現れる。何人も自ら創造したものでないが、窮極に於て、各人は自ら仕上げたものである。

この人權宣言は、アキケンナやアエロエスをではなくして、トーマスを我々の師と仰ぐことによつてのみ、承認される。彼は、人間は人格として、手段ではなく自己目的と考へられるべきことを教へた。我々は人格の何であるかを忘れて、人間を個體であるに過ぎないかのやうに取扱ふに至つた。さて、各人が自らの個體性を窮極的價値として認めることを許すやうな社會に於ては、利己主義の勝利と弱者の組織的抑壓とは必至である。前世代の所謂自由主義はこの怪物——人格からではなくして個人から成る人間社會の美名に過ぎない。このやうな自由主義に對する所謂「全體主義的國家」の反動は、假令正當ではなくとも、殆んど必然的に要求された。その代表者達は、人間が個人に過ぎなければ、社會を形成することは出来ない、畜群に過ぎないといふことを洞察した。しかし、全體主義的國家は、個體を社會全體のために服屬させる充分の根據をもつとしても、人格に對しては何等正當な權利を有しないといふことを忘れた。國家は、社會全體のために我々がなすべきこと、なすべからざるこ

とを示すことは出来るが、我々が考へるべきことを教へる權利はない。これら同一誤謬の二形態の間に動搖を無限に續けることを欲しない限り、我々はトーマスのとつた中庸道、妥協のそれではなくして、二つの誤謬の間の苦しい眞理の道を選ばなければならぬ。我々は、如何なる種類の個人主義にも陥つてはならない。我々は、個人として、全體の部分であり、全體の共通利益はその部分的私利に優るから。又他方、必ずしも「睿智」として作用しない新しい「離存實體」なる「國家」は、我々の各には國家よりも尙ほ高い或るもの、神以外にはそれに優るもののないもの、即ち人格があるといふことを忘れてはならない。これらの常に時機に適する諸原理を完全に述べた人は、單に精神の世界に於ける師であるに止らない。彼は永久に、總ての反對力に抗して、精神の優越を説くことを使命とする師である。(一九三五年二月十三日ブリティッシュ・アカデミに於ける講演、同會報第二十一卷より抄譯 服部英次郎)

## 卒業論文題目

京都市帝國大學文學部哲學科(昭和十一年一月提出)

### 哲學專攻

能力・自由・觀想——主としてアリストテレスを媒介とする

實踐の解明——

表現に於ける理解と行爲

カントに於ける道德的價值判斷とその原理

先驗的構想力の構造

歴史の地盤としての生

現象學的意識の構造

カントに於ける觸發に就いて

ヘーゲルの人倫態——人倫態の哲學——

祈り

行爲

個別的因果律に就いて

概念と自由——ヘーゲル哲學小察——

歴史に於ける發展の概念——主としてヘーゲルに就いて——

イェス・キリストの福音と文化の問題

人間の存在の理解

安藤 孝行

伊藤 太平

伊藤 恒夫

石井 武

今井富士雄

瀧澤 亨三

新谷賢太郎

多田 淳政

武内 義範

鶴橋 正雄

鍋島 弘

平下 欣一

松平 健

三鼓 豊藏

安井 勝道